

ヨナ書2章7-9節 「主の召しから逃げる時」

1A 衰え果てる魂 7

1B 主を思い出す

2B 聖なる宮に届く祈り

2A 虚しい偶像 8

1B 偽りの神

1C 「離れることができる」

2C 「隠れることができる」

3C 「御心に逆らえる」

2B 自分への恵みを捨てる

3A 感謝のいけにえ 9

1B 魚にいる時

2B 主の救い

本文

ヨナ書2章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが、小預言書に入っており、前はオバデヤ書を読みました。午後礼拝で、ヨナ書全部、1章から4章までを読んでいます。2章7節から9節までを読みます。「7 私のたましいが私のうちに衰え果てたとき、私は主を思い出しました。私の祈りはあなたに、あなたの聖なる宮に届きました。8 むなしい偶像に心を留める者は、自分への恵みを捨てます。9 しかし、私は、感謝の声をあげて、あなたにいけにえをささげ、私の誓いを果たしましょう。救いは主のものです。」

私たちはオバデヤ書において、神がいつまでも憎しみを抱き、高ぶっているエドム人に対して、それにふさわしい報いを与えられたところを読みました。しかし、もしエドム人が悔い改めて、主に立ち返っていたらどうでしょうか？主は、必ずエドム人を救い出されたでしょう。神は情け深く、恵みに富み、怒るに遅く、その恵みは千代にまで続くからです。私たちは、その部分を学びます。エドムと同じく、いやエドム以上にイスラエルにとって脅威となっていたアッシリヤに対する、神の憐れみです。

私たちはホセア書とアモス書において、アッシリヤが北イスラエルを滅ぼすことを読みました。ヨナは北イスラエルの預言者で、かつヤロブアム二世が王の時、つまりホセアとアモスの時と似たような時期に預言した人物です。アッシリヤが北イスラエルを攻めて来ることは、明らかでした。しかし、アッシリヤの首都ニネベに行き、主の言葉を語りなさいと命じられます。しかしヨナは知っていました。主は、憐れみ深い神であるということ。アッシリヤは、我が国、我が民を滅ぼそうとし

ているのに、彼らが主によって生かされるならば、そのままイスラエルを滅ぼしに来るではないか？という思いがあったでしょう。たとえ彼らが悔い改めるにしても、時が経てば心も変わり、イスラエルを倒すことになるだろう。だから、彼らは滅びないといけないのだ。それが最も、手っ取り早い方法なのだ、と。主は、彼らに罪があり、滅びるというメッセージを私に与えるが、それはあくまでも悔い改めて彼らを生かしたいと思っておられるからだ。そんなことは許せない、という思いです。

そしてヨナは、主に言われたこと、命じられたことに従いませんでした。イスラエルからはるか東にあるニネベに行くのではなく、その反対方向のタルシシュ行きの船に乗りこんだのです。主から召されていること、主から言われていることを、自分の考えや思いで従わないという大きな問題を、ヨナ書は取り扱っています。ヨナは、イスラエルが救われるため、イスラエルを滅ぼそうとしているアッシリヤが憎いという思いのために、肝心のイスラエルの神の命令さえ、それに逆らってしまったのです。私たちは、主に対して行なっていると言いながら、実は自分自身を求めていることがあります。自分の願いや思いに反して、事が反対方向に進む時は特にそうです。主が言われているのに、それに逆らえばどうなるのか？ということを見ていきます。

主は地中海に嵐を起こしました。ヨナの乗船している船が難破しそうになりました。しかしヨナは、祈りもせず、ふてくされて船底で寝ていました。怒っていたのです、怒っていたので、落ち込み、落ち込んだので寝たのです。ところが、神をまだ知らぬその船員たちは、自分たちの異教の神々で祈り始めました。ところが、どうにもならない。神々を総動員しなければいけない時に、なぜヨナは寝ているのだ、ということになりました。それでヨナを起こしたら、なんとヨナの神は、この海を造り、陸を造られた神だと言うではありませんか！それで彼らは非常に恐れたのですが、ヨナは自殺願望がありました。私を海の中に投げ入れなさい、ということです。けれども、そんなことをしたらバチが当たると彼らは思ったのでしょう、ところがもっと嵐が激しくなります。それで、彼らは主なる神、ヤハウエに対して祈って、「私たちには罪はありません、どうか、みこころにかなうことを行なってください。」と言って、ヨナを投げ入れます。すると、海が静かになりました。彼らは非常に恐れて、ヤハウエ、主なる神にいけにえを捧げました。

けれども、主はヨナを殺すことをなさいませんでした。魚に飲み込ませたのです。そして、三日三晩そこにいました。その腹の中で祈ったのが2章です。そして2章7節から9節までを読みました。彼は魚の腹の中にいて、死にかけていました。その時に初めて祈ったのです。それまでは、祈ることを拒み、ふてくされていました。しかしその苦しみの中で祈りました。私たちは多かれ少なかれ、ヨナの境遇に共感できるのではないのでしょうか？自分がしなければいけないことは、分かっています。自分が主から呼ばれていることは分かっています。主から命じられていることは分かっています。けれども、自分の思いが強すぎてそれに従えていません。主から命じられていることに従えていません。あきらめることができず、意固地になっています。けれども、苦しみは増すばかりです。そこで祈ります。初めから素直に従っていればよいのですが、苦しみの中でようやく祈り始め

ます。初めに主を求めて祈りではなく、最後の手段として祈りました。

1A 衰え果てる魂 7

1B 主を思い出す

7 節です、「私のたましいが私のうちに衰え果てたとき、私は主を思い出しました。」とあります。ヨナはこれまで、意図的に主を自分の思いから取り除いていました。ずっと自分から引き離していたのです。しかし彼は、海で嵐が起こったところから主が彼を見捨てていないことが薄々、分かっていました。そしてなんと、船員たちがヤハウエに対して祈り叫んでいるのも聞きました。そして死のうと思っていたのに、なんと魚が自分を飲み込んだのも見ました。もう主の懐から自分が離れられないことを悟りました。それで主を思い出したのです。思いの中に主を入れていなかったところに、敢えて心を開いて、主を思い出しました。そこには、もちろん主の憐れみが満ちあふれます。

同じようなことを経験した預言者がいます。エレミヤです。彼は哀歌において、エルサレムがバビロンによって滅ぼされた姿を、その悲惨を嘆いて歌っていました。その惨状について、あまりにも自己投影させていたので、まるで自分が衰え果てるような思いをしていました。「3:19 私の悩みとさすらいの思い出は、苦よもぎと苦味だけ。」と言いました。けれども、このことを思い返しました。「3:22 私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。」私たちがどのような状況があっても、そこに主がおられます。主の憐れみと恵みがあります。大事なものは、思い出すことです。

2B 聖なる宮に届く祈り

そしてヨナは、「私の祈りはあなたに、あなたの聖なる宮に届きました。」と言っています。聖なる宮というのは、エルサレムにある宮とも言えますが、神がおられる宮、すなわち天に届いたということです。祈りが聞かれるということは、主の宮にその声が届くということです。ヘブル書の著者が言いましたね、「ヘブル 4:16 ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」主の憐れみを受けられることのできる、恵みの御座が私たちには備えられています。ですから、私たちの願い、祈りが、すでに主の懐の中に入れられている、既に聞かれているのだという感触を得るのです。「1ヨハネ 5:14-15 何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。」

私たちは、この祈りの特権をヨナと同じように、どうしても最後に使っていく傾向があります。初めに祈るのではなく、問題が起こってから最後に祈るのです。初めに祈れば、起こらない問題もその問題を受けて、それで祈ります。ですから、その間とても辛い思いをします。主は、ご自分の愛のゆえにその助け、救いの手を敢えて差し伸ばしません。そしてへりくだって、祈ることができるよ

うに持って行かれるのです。しばしばよく言われるのは、水で溺れている人を助けに行くレスキュー隊は、溺れている人をすぐには助けないということです。溺れている人は、自分で自分が救おうとするので、レスキュー隊が来ても、その助けに身をゆだねないでもがくのだそうです。それでは、救助に来た人までが溺れてしまいます。ですから、その人を本当に助けるためには、しばらく溺れるままにしないといけません。もがいてもがいて、その力が弱まってしまって、自分で自分を救うのをやめようとする時に、その時に助けることができます。私たちの祈りもそうでしょう。私たちの思いや願いを強すぎる時に、それを何としてでもやっ払いこうとします。本来はへりくだって、祈り、主しかし憐れみ深い主は、そのままにされます。そして、私たちが祈り叫ぶことができるようにされるのです。

2A 虚しい偶像 8

1B 偽りの神

そしてヨナは、8 節「**むなしい偶像に心を留める者は**」と言いました。何をもってヨナは、「むなしい偶像」なのでしょう？彼は主に仕えていたはずですが、けれども、その熱心さの中で、イスラエルを思う思いが、主を思う思いよりも勝ってしまったのです。人間の心は不思議です、主から与えられた賜物、良い賜物であっても、いつのまにかその良き物を神ご自身よりも大事にしてしまう傾向があります。おそらく宗教改革者カルビンでしょう、彼は、「人間の精神はいわば永久的な偶像製造工場だということである。」と言いました(綱要 1:11:7)。

1C 「離れることができる」

それでヨナは、創造主である神を信じているはずなのが、その行動は他の偽りの神、偶像を信じているかのようにになりました。第一に、「1:2 主から離れることができる」と思ったのです。「しかしヨナは、主の御顔を避けてタルシシュにのがれようと」した、とあります。けれども、主から離れることなど、できるのでしょうか？「1:4 そのとき、主が大風を海に吹きつけた」とあります。主から免れることなど、全くできません。主は至るところにおられます。けれども、私たちはヨナのように、ここから離れれば主から離れることができると思います。教会においては、キリスト者らしく、信者らしくふるまっても、外に出れば全く違う行動がとれるというのは、教会の中だけに主がおられ、世においては主がおられないという前提があるからです。けれども、主は宣教のため、弟子たちを遣わされる時に、「マタイ 28:20 見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」と言われました。そして、ダビデによる有名な詩篇の言葉がありますね。「139:7-12 私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう。たとい、私が天に上っても、そこにあなたはおられ、私がよみに床を設けても、そこにあなたはおられます。私が暁の翼をかって、海の果てに住んでも、そこでも、あなたの御手が私を導き、あなたの右の手が私を捕えます。たとい私が「おお、やみよ。私をおおえ。私の回りの光よ。夜となれ。」と言っても、あなたにとっては、やみも暗くなく夜は昼のように明るいのです。暗やみも光も同じことです。」

2C 「隠れることができる」

そしてヨナは、神から隠れることができると思っていました。暴風が起こっていた時、船は難破しそうになり、水夫たちは必死になって神々に叫び、船を軽くしようと積み荷まで降ろしたのに、なんと彼は、「1:5 船底に降りて行って横になり、ぐっすり寝込んでいた。」とあります。ところが、船長が近づいてきたのです。そして、あなたの仕事は何か、出身は、国はどこかのか？問い質されたのです。それで彼は、「1:9 私はヘブル人です。私は海と陸を造られた天の神、主を礼拝しています。」と答えてしまいます。彼は誤魔化せなかったのです。彼は、主から隠れることができると思っていました。船長を通して見付けられてしまいました。そして、自分のせいで嵐が起こっているということも、話さなければいけなくなりました。ヨナは、天地創造の神を信じていると言っても、自分のことを隠せると思っていたところで、偽りの偶像に拠り頼んでいたと言えます。

私たちの信仰は、どんなに隠せるとしても、隠しおおせるものではありません。そして人はみな、自分の隠していることを隠せると思っていますが、隠せません。「ヘブル 4:13 造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。」私たちの心や思い、全てのことを読み取られる方であり、主が私たちに対する思いは海の砂の数よりも多いと詩篇 139 篇に書かれています。

3C 「御心に逆らえる」

そして何よりも、ヨナが偽りの偶像に頼っていたと言えるのは、「主の御心に逆らえる」あるいは、「主の召しに逆らえる」と思っていることです。ヨナは、自分が死ねば神の召しから免れることができると思ったので、海の中に投げ入れてくれと言いました。しかし、神は死なせませんでした。ヨナはそれだけ神の召しから免れませんでした。彼は預言者であり、神の語られること、その命令を伝えることが神の意志です。それは結構です、私は私の方法でやっていけますと言って、「ああ、そうですか。分かりました。」という神がおられたら、それは聖書の神ではありません、偶像です。イスラエルがイスラエルとして、その神の選びと召しは変わらないことをパウロが話したことがあります。「ローマ 11:29 神の賜物と召命とは変わることがありません。」

私たちは、自分で選んで、自分で願ったことを自由に行なえる社会に生きています。そのために、意外にヨナと同じように、神を信じているといいながら、異なる神をあがめてしまっているかもしれません。「私は、こういうことが得意で、あれあれができるのに、なぜそれをやらせてもらえないのか？」と会社で文句言うことがありますよね。会社ではあるでしょう、けれども主の召しにおいてはなりません。えり好みをするような領域はないのです、主が言われたことがあって、それに従うという仕える姿が、私たちに唯一、与えられている姿勢です。けれども、「自分のしたいことを神がかなえてくれる。もしかなえてくれないなら、私はこの神は要らない」としたら、どうでしょうか？あるいは、「神が愛なら、なぜこんなことを私になさるのですか？」と言って、不信の罪に陥ったらどうでしょうか？しかし、神に召されたこと、神に命じられたこと以外に行なって、自分式に生きていけると

思ったのであれば、もはやその神は、イスラエルの神ではありません。その主は、イエス・キリストではありません。

私たちは神によって救われました。罪から救われました。それは同時に、主に選ばれ、召されたということです。良い行ないをするように予め選ばれた、神の作品です。この方の主権に自分を任せる時に、私たちは最も幸せであり、満足し、平安でいられます。

2B 自分への恵みを捨てる

そして、主の召しから逃げるということであれば、それは自分への恵みを捨てることです。ヨナは言いました、「**自分への恵みを捨てます。**」主が、これほど憐れんでおられて、好意を持っておられるのに、それから逃げるのですから、自分にとっての最善から逃げるようなものです。逃げれば逃げるほど、ちょうど砂の中から這い出すように、どんどん深みにはまってしまいます。パウロもそうでしたね、彼はキリスト者がいれば、片っ端から捕縛して、イエスの名を冒瀆するように強要し、恐ろしい人でした。でも、ダマスコに行く途上で、イエス様が現れました。「**なぜわたしを迫害するのか。とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。(使徒 26:14)**」彼は、自分に対して痛みをもたらしていたのです。私たちが、どれだけ自分に対する神の呼びかけを拒んで、自分に対する恵みを捨ててしまったことでしょうか。主の良さ、その憐れみ深さ、その聖さ、すべての賜物にあずかれるはずなのに、それを自ら拒んで、自分自身を苦しめています。

3A 感謝のいけにえ 9

しかしヨナは、悟りました。祈りました。9 節、「**9 しかし、私は、感謝の声をあげて、あなたにいけにえをささげ、私の誓いを果たしましょう。**」とっています。

1B 魚にいる時

ここで大事なものは、彼がどこで感謝の声をあげているか、ということです。どこで、いけにえを捧げる誓いを立てたか？ということです。そう、魚の腹の中です。彼は、まだ救い出されていないのに、その中で既に感謝の声を上げていました。彼は祈りを腹の中から捧げました(2:1)。そしてその祈りが聞かれたことを知りました。それで、そこで感謝しました。後に救い出されるのですが、私たちの神はこのように、先んじて祈りを聞いてくださる方であり、私たちが実際に事が起こる前に、先んじて感謝をささげることが出来る特権にあずかっています。

救いそのものがそうですね、罪からの救い、死からの救い、そして神の怒り、地獄からの救いを、今、受けました。感謝しています、また自分自身をイエス様に捧げますと、心から言うことができます。まだ、その救いをこの目で見ていないにも関わらず、です。私たちの主は、永遠なる方です。先に行われることを、御霊によってすでに起こったこととして私たちの内で確信を持つことができるようにして下さいます。そこには、信仰を十分に働かせているからです。それを心から信じて、喜

んでいるのです。

2B 主の救い

そして、ヨナは言いました。「**救いは主のもので**す。」これは、なんとすぐれた信仰告白でしょうか！こんな短い言葉ですが、これほど正しく、真実なものはありません。救いは自分自身から出るものではなく、もっぱら主のものです。彼は、自分自身を救おうとしました。自分の思いや願いを捨てることができず、自分のやり方でやっていこうとしました。これは自分で自分を救おうとする行為です。けれども、自分で自分を救おうとすればするほど、船の底へ、そして、海の深みへと下って行きました。そして自分で救おうとするのをやめたときに、主が救ってくださるのです。私たちの人生は、「自分で救おうとして、救いを失うのか？それとも自分を失って、それで主が救ってくださるのか。」の二つの選択があるのです。

私たちはある意味、このことを経験し続ける存在なのでしょう。パウロは激しい迫害を受けて、ある時に死を覚悟したことがありました。しかし救われました。こう言っています。「2コリント 1:8-10 兄弟たちよ。私たちがアジアで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにはいのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。ところが神は、これほどの大きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださいという望みを、私たちはこの神に置いているのです。」

もう一度、イエス様が弟子たちに言われたことを思い出しましょう。「マルコ 8:34-37 それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。人は、たとい全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありません。自分のいのちを買い戻すために、人はいったい何を差し出すことができるでしょう。」ご自分の生活がもしかしたら、少し問題があっても、安定して、順風満帆だとお感じになっているかもしれません。けれども、もし主がその快適な領域から出て、わたしについて来なさいと命じられたらどうしますか？そして事実、主は、それぞれの場所で、それぞれに合った方法で、「自分の十字架を負い、わたしについてきなさい。」とされています。犠牲があります、自分の願いややり方を捨てる必要があります。「自分」が人生の主人になっているところを、主導権をイエス様にお渡ししないとはいけません。